

# 教育における minimum essentials にかんする考察

金 光 靖 樹

A Study of "Minimum Essentials" in Education

KANEMITSU Yasuki

## はじめに

今日の教育における問題状況を概観すると、その原因はまず、何のための知識教授かということにかんする理解が十分でないことがあげられるのではないか。そして、そうした理解の欠如により、知識重視の教育を批判することから短絡的に道德教育の優位を主張する言説を唱える傾向が存在する。しかし、本来、道徳的な内容もいわゆる科学的知識も人間の認識に由来するものであり、それらはともに人間の認識行為に由来する病理の悪の積極性を軽減していくために寄与するものでなければならないはずである。

この認識に由来する人間の病理は世界の分節化にともなうものであるが、その過程を分析することによってこの病理の悪の積極性を軽減していくことを目的とする立場から、アメリカの分析哲学者であるヒラリー・パットナム (Hilary Putnam, 1926-) の立場を採用することにする。パットナムの立場は、対象の实在は概念図式から独立しては存在せず、何らかの記述図式を導入することによる我々の世界の分節化によって対象が出現するというもので<sup>(1)</sup>、このように实在というものを把握することにより、科学的知識と道徳的内容を同じ人間の認識に由来するものとして、同じ地平で分析を施すことが可能になる。したがって、本稿では仮説的に、対象はある記述理論の内部にのみ存在するというパットナムの内部实在論の立場を採用することにする。しかし、対象の实在が記述図式と不可分であるとするならば、客観性というものも存在しえず、無制限の相対主義へと至るのではないかという疑念が生じる。これにたいしパットナムは、客観性にかんして、「神の眼」が存在しなくとも、整合性と適合性によってその存在は保証されるとしている<sup>(2)</sup>。これは、何らかのア・プリオリな真理の实在を認めない一方で、人間の不断の努力による整合性と適合性の追求によって、その時々における最高次の客観性というものをも求めうるということの意味する。

したがって、本稿ではこうしたパットナムの示唆にしたがい、まず、主体による世界の分節化の過程の分析からそこに存在する人間の認識の病理を見出し、科学的知識や道徳的内容はともにその病理を癒すことに寄与するものであるということを確認することから論考を始める。そこで、ア・プリオリな道徳的内容などを認めない立場から、なおかつ最小限の教育内容の核となるべきものに言及するとすれば、それは科学的知識による問題解決を妨げがちな人間の認識行為に

おける性向を抑制することに寄与するものであるということになる。

従来、このような必要最小限の内容—すなわち、minimum essentials といえ、米国において進歩主義教育に対立する立場として台頭した本質主義者たちの提唱したものがよく知られている。これらは元来、今世紀初頭に生じた初等教育におけるカリキュラムの膨脹を整理するためのものであったが、現在では、進歩主義との対立状況から一歩進んで、経験学習にもその体系化原理としてとりいれられるに至っている。

本稿では、科学的知識を中心としたいわゆる文化的遺産としての minimum essentials の考察よりも、この文化的遺産を用いて、さらにそれがはらむ病理をも乗りこえていくために、こうした文化的遺産の核となるべき理念、いわば、minimum essentials の minimum essentials というべきものを問いなおすことを主題としたい。このような考察をもとに、いわゆる minimum essentials というものの存在価値を問いなおし、それによって、現代の教育において問題となっている知育偏重という状況を考慮した上での新たな minimum essentials の構成を考えていく契機としたいからである。

## 1. 世界の分節化とその病理

まず、最初は人間の認識における世界の分節化の過程とそこに存在する人間の病理を分析することから始めることにする<sup>(3)</sup>。

ここでいう世界という言葉は M. ハイデッカーのいうところの [世界] とほぼ同義であると考えてよいのであるが、この分節化された世界の中では事物は [個体] として出現する。この [個体] は何らかの同一指定の [基準] がなければ、その [個体] として出現することはできないのであるが、この [基準] という言葉には何か形而上学的な [本質] の影がちらつく。しかし、この [基準] は、いわゆる形而上学において語られるようなア・プリオリな [本質] では決してありえない。[個体] の同一性は決して端的に積極的な性格を示すものではない。時間の経過や見る角度の変化にすら同一性は動揺を見せる。だから、この [基準] が保存され、引き継がなければならないのであるが、ここですぐに、属性の変化にもかわらず、自己同一性を維持しようような実体を考えるには及ばない。もし、世界が刻一刻別の世界に生まれ変わるならば、空無によって限定されなければならない。しかし、現実の世界においてはそのような不変なるもの（たとえば超越）に言及せずとも、二つのものの関係における同一性は語り得るのである。

そこでまず、[個体] による分節化の基準となりやすい [種] の成立の過程を分析してみる。いわゆる形而上学的な立場からすれば、[個体] は人為的分類に先立って集団を形成していることになるのだが、はたしてそうだろうか。そこで、この [種] が分類によって形成されていく過程にかんする認識の自然な姿を見届けるために、生物学的な [種] の概念に影響されていない [種] の分類についての研究として文化人類学者の E. リーチによる [種] にかんする研究を参照してみよう<sup>(4)</sup>。リーチによると、分類の基本である二項分割はそれら二項の間に曖昧な中間カテゴリーを媒介させることによって達成されるという。この中間カテゴリーがいわゆるタブーの対象なのである。しかし、このリーチの定式において注意しておかなければならないのは、二項分割と中間カテゴリーの設定とは同時になされるものだということである。この点にかんしては、やはり文化人類学者である M. ダグラスの汚穢の研究が参考になる<sup>(5)</sup>。元来、汚れの観念は「何々

にとって汚い」という指向的な観念である。かへ行つて、この汚穢という観念は、たんに個人心理的なものではない。汚れているとされるタブーの対象は、社会的な確認事項である。しかも、全く衛生的に問題のないものでも、汚れたものになりうる。つまり、汚穢は象徴なのである。曖昧なる中間者に汚穢のディスクールを付すことにより、象徴化し、それによって同時に二項分割を成立させて、分類を完成し、この分類の積み重ねによって我々は世界を分節化し、認識世界を形成しているのである。先程の〔基準〕は認識世界からの要請だったのである。個人は自己の認識世界からの要請により世界を分節化し、社会はその社会における共通の認識世界創成のために、個人に圧力を加えるのである。このように、〔意識〕の自由は制限つきの自由であり、この制限というものを謙虚に見詰めなおすことは我々にとって重要なのではないかと思われる<sup>(6)</sup>。

こうして認識という営為を見詰めなおしてみると、その常態は、述語によって世界を切り刻んでいくことであり、事物へと接近しようとはするものの、その接近は述語による分節化によって停止しなければ成立を危うくされるものであることが理解される。いわば、我々は本能の欠如をこの惰性態としての認識世界創成によって補っていることになる。したがって、認識世界創成は我々にとって不可欠なものでありながら、また病理でもあることになり、我々はアイデンティティを形成しながら、同時に差別を行ってしまう運命にあることになる。しかし、このような宿命を持つ認識世界創成ではあるが、遅々たる歩みながらもその改善がなされていることを無視してはならない<sup>(7)</sup>。象徴化され怪しげな意味を付与されることにより、我々のいわゆる合理的思考による処理が困難になった状態において、我々はこの象徴的意味の妥当を括弧に入れなければならない。そのような状況を人為的に構成し、解釈をしなおすことにより、当事者が合理的に〔自覚〕することを促すのである<sup>(8)</sup>。そして、このことが認識世界の改善の第一歩となるのである。

## 2. 解釈と知識

前章において我々は認識世界創成にともなう病理をさがすために解釈が要請されるということを確認した。では、その解釈とは何なのか。この問いに答えるために、まず文化人類学者であるD. スペルベルによる情報の象徴的処理とその解釈にかんする研究を参考にして論考をすすめることにする。なぜならば、前章において象徴的思考と合理性という問題と解釈の関係が浮かび上がってきたからである。

スペルベルは、従来より前理性的なものとして捉えられてきた象徴的理解を人類学の視点から問いなおし、人間の認識の本質的な営みであることを主張する<sup>(9)</sup>。従来、知覚された情報は象徴的な処理を経たのち、理性的に処理されると考えられてきた（ここでの〔理性的〕という言葉は合理的、論理的という意味に解してよい）。それにたいしスペルベルは、理性的な処理の手に負えなかった情報を象徴的に処理するという図式を仮設した。つまり、直接、論理的に処理できなかった場合、その情報は象徴的に何かを意味するものだと気付いてチャンネルを切りかえて記憶を検索しなおすというのである。このような記憶の呼びおこしは象徴が作成されたり、それが記憶に印象づけられたりしたときの精神状態の想起であり、論理的な想起ではない。このような象徴の持つ弊害は、これらの象徴的想起が習慣化し、あたかも論理的に処理されているかの如くに扱われたときに生ずる。このとき象徴的意味は疑似的な理性的処理に隠蔽されて理性の歯止め

をかけられることなく暴走するのである。では、象徴的思考は絶対的に悪なのだろうか。

スペルベルによると、ある情報が認識システムの基礎をなす諸原理を問題視させるとき、知性の注意がどうであれ、この情報は象徴として処理されるという<sup>(10)</sup>。たとえば、神秘的因果性、宗教的秘儀などがその例としてあげられる。これらは実際に体験して得た知識からは決して論理的に処理されえないはずである。また、主体の注意の度合いが極めて低いとき、処理される情報の大部分は理性的装置を過負荷にし、象徴的処理を惹起する傾向が高まるといふ<sup>(11)</sup>。これは、ある種の夢や心的組織破壊のある状態を考えてみれば理解される。そしてもう一つ、主体の注意に委ねられた情報を彼が処理する際、彼が使用し得る図式の数が少ないとき象徴的処理に依存する蓋然性が高まるといふ<sup>(12)</sup>。たとえば、こどもたちは大人と比較して知識の絶対量が不足しており、象徴的処理に依存する傾向が強いが、彼らは、その後の知識発達により、環境との理性的相互作用の可能性を様々に増大させ、理性的処理能力を高めていくと考えられる。このように考えた場合、象徴的処理はたしかに人間を誤らせる可能性を有するものには違いないが、我々の認識においてかなり積極的な役割をはたしていることも同時に見てとれる。つまり、認識世界創成に一役買っているのである。

さて、このスペルベルの図式を、第一章で展開された「曖昧なるものの形而上学」の見地から読みなおすとすれば、理性的処理は人間にとってより自然な認識過程であり、象徴的処理に先んじて行なわれるが、ともに曖昧なるものの差別という過程を含んでいることにはかわりはないはずである。したがって、論理的に処理するとはいうものの、完全には客観的でありえないのだから、これら両者の違いは論理性の程度の差異として相対化されなければならない。

そこで有意な解釈というものに一応の定義を与えるとすれば、象徴的理解から理性的理解への座標軸上の移動を促すものといふことができる。つまり、今のところ善悪両面を備えた象徴的理解の悪の積極性を軽減してくれるものを有意とみなすより他はないのである。

実は解釈の理論化の不可能性を示唆する分析が存在する。W. クワインによる「翻訳の不確定性テーゼ」<sup>(13)</sup>がそれである。翻訳はいわば、解釈と「記述」<sup>(14)</sup>の中間的な存在である。解釈も翻訳も、端的にいえば、同義性を保持していれば適格的なのである。したがって、この「翻訳の不確定性テーゼ」は解釈の不確定性をも示唆することになるであろう。この「翻訳の不確定性テーゼ」とは、翻訳の手引きは何とおろか存在し、それにもとづく各々の翻訳は元の言葉と両立するが、その翻訳の手引きどうしはお互いに相いれないということを中心とするものである。ただし、ここでいう翻訳とは「根底的翻訳」<sup>(15)</sup> (radical translation) のことである。この説明に挿話としてよく引用されるのが“gavagai”という言葉である<sup>(16)</sup>。これは、ある言語学者が未知の群島へ行ったとして、そこでウサギが飛び出してきた時、現地人が“Gavagai”と叫んだのを聞いて、この言語学者が“gavagai”を翻訳することは、厳密にいうと不可能であるということを示唆する例である。つまり、ある一つの状況とそこでの発話という限定されたデータからの類推による翻訳の不確定性について述べているのであるが、これは解釈にしても同じことなのではないか。つまり、解釈の適合性も翻訳の適合性も、その判断は後々の経験との適合性によって判断されるしかないのである。したがって我々は、先程のべたように、象徴的理解から理性的（合理的）理解へといざなうものとしての解釈について経験的適合性からその有意性を計っていくしかないということになる。

しかし、パットナムはある記述理論の内部において客観性を保持することが可能であると述べていることを思い出すと、[翻訳の不確定性テーゼ]はパットナムの見解と一見、背反しているように思われる。そこで、パットナムが[翻訳の不確定性テーゼ]にかんして展開した論考<sup>(17)</sup>を検討しなければならない。パットナムは、この[翻訳の不確定性テーゼ]が妥当であるのは関心相対性というものが背景に存在する場合であるとしている。つまり、“gavagai”を翻訳する際に、兎が飛び出してきたという状況にたいして、複数の人々が全く異なった関心をもってその場に臨んでいたとすれば、この言葉の翻訳もまちまちになるだろうが、同じ関心をもってその場に臨んでいたとすれば、必ずしも翻訳が不確定的であるとはいえないというのである。そこで、同じ関心を持つもの一すなわち、同じ記述理論にもとづいて事物に向かうものたちにとっては対象は実在し、翻訳は整合性の確認によって確定しようという内部実在論に辿りつくのである。

しかし、この見解にたいして我々は何か釈然としないものを感じてしまう。それは、おそらく、関心というものが全く一致することがあるのかという疑問が残ってしまうからであろう。実は、パットナムはかつて反実在論者であった。それがこのような実在論者に転向することになったのにはそれなりの理由がある。整合性をもとに我々の共通理解を深めていくには学習が必要である。この学習が成立していることを確認しなければ、新たな共通理解には達しえない。この確認が万一、膨大な知識の全体的体系の整合性のチェックを要するとするならば、それは事実上、不可能といわざるを得ない。また、実在をあくまで否定して、真理を保証付主張可能性とする直観主義者の言説が矛盾をはらんでいることもパットナムは論証してしまった<sup>(18)</sup>。そこで、パットナムは論理的思考によって共通理解へと歩を進めるには理論の内部において対象は実在するとせざるをえないという結論に達したのである。したがって、パットナムによれば科学的認識においては[翻訳の不確定性テーゼ]は無用の長物ということになる。しかし、我々が必要とするのは、解釈によって、病理をはらんだある記述図式の外部へと主体を引きずり出すことである。つまり、解釈は、パットナムが[翻訳の不確定性テーゼ]の有効性を認めた関心相対性の存在する状況下で活躍するものなのである。

そこで、このような議論をもとに知識と解釈ということにかんして少し整理しておく必要がある。前述のように、組織化され、整合性を有する知識群は象徴的思考の蓋然性を減少させる。つまり、科学的知識は象徴的思考による悪の積極性を軽減してくれるものなのである。しかし、科学は一枚岩ではない。様々な分野がそれぞれの内部にそこでのみ真理とされる実在を持つのみである。しかし、科学理論の内部で整合性をたかめようとする努力も、解釈によって認識世界の整合性をたかめようとする努力も、ともに共同的な認識世界を拡大していく営為であることにかわりはない。その意味では、現代の学校教育において科学的知識の教授がその中心となっていることじたいには問題はないのである。たんなる知育偏重にたいするアンチ・テーゼとしての道徳教育の重視に明確な根拠は見当たらない。むしろ、問題なのは、知識がなんのために必要とされるのかということへの正しい理解の不足である。こうした状況から脱していくために、解釈をより整合的で誤りの少ないものとしていくための手段として我々は知識を必要とするのだということをこれまでの考察から確認できたはずである。

### 3. 心理的発達段階と道徳の相関関係

では、道徳と呼ばれるものが仮に教育に必要であるとすると、それはどのような意味においてであろうか。我々は、ア・プリオリな道徳の内容を措定することを潔しとしない。しかし、科学的知識を中心とした解釈による人間の病理の軽減を妨げる要素が存在するならば、我々はそうした要素を抑制すべく何らかの人為的施策をなさねばならない。ただ、こうした意義においてのみ必要不可欠で最少限の徳目が、整合性と適合性の追究の中で設定されることを許されるのである。

そこで、このような解釈をさまざまのものについて考えてみると、心理的な要因によって生じる、ある種のかたくなさを想起することができる。しかし、従来、教育哲学においては、現象学や人間学、実存主義の立場から人間を開かれた自由な存在として捉え、心理学的な知見を決定論的に採用する立場は還元主義的であるとして批判の対象とされてきた。確かに、人間が個々の状況においてある態度をとる自由を我々は認めなければならない。我々は認識の際、事物との相互作用の中で述語によって世界を分節化して認識するのだが、ここで、個々人は各々の認識世界創成のために各自の記憶痕跡を呼びおこしていく。認識論的に見ても、ここに認識主体の自由は認められるのである。しかし、決定論や還元主義は認められないものの、心理学的知見に今一度注目することは必要であると思われる。なぜならば、ア・プリオリな措定を拒否し、適合性と整合性から何らかの徳目を考えようとするならば、認識論的な分析のもとに整合性が確認されれば、その適合性自体はある程度、首肯しうるものがあるからである。

そこで、認識論を軸として整合性と適合性を客観性の根拠とする観点から科学を捉える立場から、深層心理学の知見を認識論的に読み換える作業を行ない、還元主義におちいることなくそれらを拾いあげていくことが重要になってくるのではないだろうか。

深層心理学が還元主義的であると断定される原因は何といても無意識という措定を大前提とするところにある。我々はすでに意識の自由が存在することは認めている。しかし、無意識が意識のはたらきによっていかんともしがたい絶対的存在であると仮定した場合、同じ大脳という中枢のはたらきに依存した認識でありながら、自由な意志を持つ意識という構造と、それを支配してしまう無意識という構造を同時に認めてしまうことになる。意識の自由を保証する実体としての〔主観〕が何らかの純粹無垢のものとして存在することはありえないということはM.メルロ＝ポンティの考察などからしてもあきらかである（本稿の註<sup>(6)</sup>参照）。とすれば、意識と無意識を相対化する作業なしには意識の自由を〔心理学的現実〕の中で保証することができなくなってしまう。そこで、ことさら無意識の認識論的再解釈をおこなうのである。

この無意識という概念の根拠となっているのが〔抑圧〕とよばれる事象であるが、この〔抑圧〕を我々は認識論的に読み換えていくことができないだろうか。第一章でとりあげた〔曖昧なるものの形而上学〕からすると、個々人の認識世界において、曖昧なるものは周知のように周辺においていやられ象徴性を帯びる。この事実と、神経心理学における情報検索とその障害にかんする言説とを重ね合わせてみる。坂野登によると、意識化しようとしてもそれに失敗し、無意識層に眠っているかのような記憶痕跡の検索の失敗の例として、効果的な検索の方略が欠けている場合が考えられるという<sup>(19)</sup>。つまり、このような場合、記憶のなかでの問題の材料の組織化の方法が検索にとって不適当なのである。いわゆる抑圧された記憶痕跡は、このような組織化された構造のなかに含まれ難い性格を持っていることが想定されるのである。〔世界創成〕はその中心に近い

ほど事象の明証性が高くなるようにおこなわれる。すなわち、中心に近い事象にかんする記憶痕跡は組織化の度合いが高く、検索されやすいのにたいし、周辺にうごめく曖昧なるものどもにかんする記憶痕跡は、組織化された構造からはいわば除け者にされているのであり、抑圧されたかの如く、象徴としてよりその姿を現わさないのである。

このように考えれば、無意識というものが決して絶対的な措定として温存されるとは限らないのではないか。そこで、さらにフロイトが主張する「超自我」にかんしてもこのような分析を加えてみよう。フロイトによれば、「超自我」は無意識的なものとして「自我」を監視し、正常者における道徳的良心、罪悪感や「自我」にたいする理想を与えるものとされている<sup>(20)</sup>。そしてこの「超自我」の形成過程はフロイトによって、彼自身の汎性欲論にもとづいて次のように説明される。こどもは、同性の親の脅かしや処罰にたいし、それを拒絶することによって愛情を失なうことを不安視し、異性の親への近親的な愛情を断念するのだが、その過程で禁止者としての同性の親が「自我」のなかにとりいれられる。そしてこの「自我」のなかにとりいれられた同性の親が「自我」を監視し、それを支配するのだというのである<sup>(21)</sup>。フロイトはこのような過程をすべて生物学的に快感充足の過程として説明してしまうが、E. H. エリクソンはこれを社会関係にもとづくものとして読み換えていく<sup>(22)</sup>。彼は3～5歳というこの時期のこどもにかんして次のような説明を加えている。この時期のこどもの重要な対人関係の範囲は基本的家族であり、関係の深い社会秩序的要素は理想的な標準型であるという。この時期になるとこどもは自律を行なうようになり、さらに自発性を発揮しだす。ここでは、こどもはすでに、自分自身を操作できるようになっているので、道徳的責任感を徐々に発達させることができる。そこで彼は自己の自発的行為にたいしての罪悪感から、基本的家族を理想的標準型とした模倣を基礎として自身の道徳的基礎を築きあげていくのである。以上がエリクソンによる説明の概略であるが、この理想的標準型が同性の親であるとすれば、フロイトの説明と表面的には合致するわけであり、ヨーロッパというひとつの文化において、この標準的理想型が同性の親になるような文化的伝統が存在していれば、フロイトが「超自我」という措定を思い立つに至ったことは不自然で強引なこじつけとはいえない。では、この「超自我」とフロイトがよんだものは何故に「無意識」から我々の「自我」を支配するかのように映るのか。

そこで、認識世界創成という営為を「自我同一性」すなわち、アイデンティティーの保持あるいは形成の過程であると考えてみよう。この認識世界は幼児期の対人関係から歴史的に積み重ねられ創成されていく。この認識世界において、幼児期の理想的な標準型である基本的家族は中心に配されたまま保存されていくケースが多いと推測される。このような中心に近いものとその周囲に配された属性を改変することは主体にとって多大なエネルギーの消費を迫る。なぜならば、このような中心に近いものを改変することは全体の構造変換を余儀なくするからである。そのため、この中心に近いものの改変を要請するような事象に直面した場合、人間はその事象を自然と認識世界の周辺に追いやろうとしてしまう。追いやられ、差別された事象は「抑圧」され、「無意識」の底で「超自我」に囚われたかの如くにうつるのである。ところで、メルロ＝ポンティは『幼児期の対人関係』の中で「心理的硬さ」ということにふれているが、この「心理的に硬い」ひとには、知覚的にも「硬さ」がみられるということを示しながら述べている<sup>(23)</sup>。そして、心理的に硬い被験者は、一般に自分の反応構成を組み直すことをいやがるのだと指摘し

ている。とすれば、[心理的硬さ]は認識世界創成の産物であり、超自我と同根のものであるといえる。そこで、教育ということについて考えた場合、決定論的で通文化的な普遍性を認めることはできないにせよ、人間の本能に代わる生存のための機制としての側面を認識世界創成はもっているものであり、この3～5歳という時期に生じてその後の人生に影響をもたらすづける可能性を有するこうした現象を無視できない。したがって、この時期のこどもたちにとっての理想的な標準型たる周囲の大人たちが与える道徳的内容にかんしてはその選択について細心の注意が必要であり、人間にとって普遍的に必要な不可欠なものを中心に考えられなければならない。このように、深層心理学における知見は認識論的に読み換えられたとき決定論的ではなくなるが、その一方で認識論を中心とした全体論的人間観の中に接収される。この時、その知見は道徳主義者にとっても無視できないものとなり、道徳教育というものを考える際の一状況を提供するものと考えることができる。

#### 4. minimum essentialsの核としての[寛大さ]

これまでの分析から理解しうることは、我々は幼児期にこどもたちに伝えられるべき何らかの徳目が適合性という観点からして必要とされるということとともに、その選択は慎重を期さねばならず、さまざまな有意とされる言説との整合性を有するかたちでおこなわなければならないということである。そして現在のところ、それは幼児期にその源泉を持つ心理的なかたくなさを少しでも緩和するものであるということが確認済みである。我々は認識世界創成の病理をあがなうものとして解釈という営為の重要性を学び、個々人の認識世界を重ね合いながら、共同的な認識世界をつくりあげていく必要性を確認してきた。しかし、厳密に言えば、[翻訳の不確定性テーゼ]からしても、完全な共通理解というものは理論上は望めないというのが現実である。それでは、我々にとって解釈を媒介として共同的な認識世界を拡張していくことは不可能なのか。これにかんして、分析哲学においては[寛大の原理]<sup>(24)</sup>(Principle of Charity)という考え方が提供されている。これは「Sが真なのは、Pのとき・そのときに限る」というときの、文Sの[真理条件]を与えるこの文—これを規約文Tと呼ぶ—を他者が「真とみなしている」という前提で翻訳や解釈を行なうべきであるという内容を持つ。つまり、ひらたく言えば、相手もそんなに出鱈目なことを言わないだろう、という[寛大さ]が解釈のためには必要なのである。しかし、この[寛大さ]を妨げるのが、例の認識世界創成に根づく[心理的硬さ]なのである。これは、我々の異文化にたいする偏見が、この民族はこんなもの、といった自己の認識世界にもとづく原初的偏見によって寛大な理解が阻まれて一層強い偏見と化していくという事態を想起すれば、おのずと理解されるであろう。この種の[寛大さ]は、主体がその認識世界の核を形成していく幼児期に意図的にその核の一部となるべく教授されていくべきものなのではないだろうか。

また、その一方で、このような[寛大さ]をもって受容される人間であることも肝要である。哲学的人間学などにおいて、人間は自由であるがゆえに[責任]を有するという言明がなされるが、これは真理を超越的なものとし、それに漸近していく[責任]という文脈で語られている。しかし、我々はこれまでの分析から超越への依存の必然性を何ら見出だしていない。我々は[寛大さ]をもって受容されるべき人間となるための[責任性]をこどもたちに伝えていかなければならないのである。[誠実]などといった徳目にかんしても同様のことがいえる。また、実存と



いう問題にかんしていえば、我々が、問題状況をはらんだ認識世界の整合性をかなぐり捨てて、解釈によって新しい整合性へと向かうことはある意味では〔企投的〕でもある。しかし、分析哲学の立場からは、その過程を〔直観〕によって到達するような超越的真理への漸近と捉えるようなことはできない。内部实在論の立場を堅持するならば、ア・プリオリな措定を認めることは不可能だからである。

以上のような考察を踏まえて、教育における minimum essentials の核となるべきものについて考えてみると、まずひとつは、これまでに分析してきたとおり、認識世界創成における悪の積極性を軽減するための解釈の第一歩となる〔寛大さ〕ということになるであろう。そして、さらに現段階でもうひとつつけ加えるとすれば、それは解釈の際の葛藤に耐える基礎となる自己への〔基本的信頼感〕<sup>(25)</sup>ということになるのではないだろうか。ひらたくいえば、相手の話を真剣に聞き、相手のことを知り、世界を知る。そして、それに耐えうる自己の強さを養うという極くありふれたものになる。しかし、我々はこのことによって解釈への途を拓かれ、個々の認識世界の、ひいては共同的な認識世界の負わされた原罪をあがなっていくのである。

#### おわりに

ここまでの考察において、我々は教育における minimum essentials の核となるべきものは〔寛大さ〕と自己にたいする〔基本的信頼感〕ではないかという目途をたてることができたと思われる。しかし、我々はここでひとつのジレンマに陥らざるをえない。つまり、「知る」という営為は他者との整合性を分析的に追及する遠心的な行為であるが、「信じる」という営為は自己の認識世界の中心とのつながりを求める求心的性質を持っており、この相反する性質を有する二つの営為のもつ特性が同時に要求されることになるのである。

この「知る」と「信じる」とのジレンマを解消しようとするならば、そこで要求されるものは、たんなる合理性にとどまらぬ理性というものであり、また、その探求ではないだろうか。パットナムは異なる記述図式間を横切って整合性や適合性を確認していく能力としての理性というものの存在を主張している<sup>(26)</sup>。ある記述図式の内部では対象が実在し、たんなる合理性のみでもそこにおける客観性の保証は達成しうる。しかし、ことなる記述図式にまたがる客観性の保証にはたんなる合理性にとどまらぬ能力が求められる。それがパットナムの主張するところの理性なのである。このたんなる合理性にとどまらぬ理性というものにかんする論考として注目すべき研究成果をひとつあげるとすると、米国の哲学者であるマーク・ジョンソン（Mark Johnson, 1949-）の想像力論をあげることができる<sup>(27)</sup>。詳細にかんする分析は他日に期すとするしかないが、簡単にその研究内容を紹介しておくと、彼はパットナムの示唆をうけて、理性には合理的思考力以外に、その基礎として想像力が不可欠であることを主張する。つまり、論理的思考においてもその基礎には基本的な身体的経験からの隠喩的投射の過程が存在するというのである。このジョンソンの考察から我々が学ぶうことは、minimum essentials としての文化的遺産をこどもたちが整合性を失わぬように身につけていくためにはこどもたちに基本的な身体的経験をつませる必要があるということと、それをもとに隠喩的投射をおこなう能力を養うことが必要だということである。これらを経験学習の中で育てていくことも可能であると思われるが、基本的身体

的経験の形成は体育教育の、そして隠喩的投射の能力の育成は芸術教育の minimum essentials の核として、それぞれのカリキュラム構成の基本理念としていくべきなのではないだろうか。そして、この想像力を基礎として、文化的遺産を整合性を保つことができるようなかたちで教授し、[寛大さ]をもとにさらに整合性を高めていけるように最小限の要素を選定し、それをカリキュラムとして構成していかなければならないではないだろうか。

(註)

- 1) Hilary Putnam, Reason, Truth and History (Cambridge: Cambridge University Press, 1981), p.27 et passim.
- 2) Ibid., pp.54-55.
- 3) ここでの考察はおもに、菅野盾樹『我、ものに遭う』(新曜社, 1983)の6-8章を参照している。
- 4) 同上書, p.246参照。
- 5) ダグラス, 塚本利明訳『汚穢と禁忌』(思潮社, 1985): pp.79-87.
- 6) 従来, 現象学などでは人間の[意識]の自由ということが語られるが, その根拠となっていたのは何らかの[主観]の存在である。そして, この主観性の根拠とされていたのが Cogito であったのだが, これを問いなおしたのが M. メルロ＝ポンティであった。彼によると, 「私は考える」という発語の次元の構成物を知覚している以上, この「考えている私」を知覚している「私」は決して還元不能の意識ではありえないという。このように考えていくと, 明証的な主観性の根拠は存在しないことになるが, [主観]の存在の結果と思しき現象が現に存在している以上, Cogito という概念を括弧に入れただけでは何の解決にもならない。そこで, 「私」の実体について穏当な仮説をたてるとすれば, それは記憶痕跡の組織化された集合体とそれを宿す身体ということになるだろう。そして, この組織化, 構造化の過程と様態に主観性の秘密が隠されていると考えることができる。この組織化の過程と様態にせまるには人間の認識行為における世界の分節化の過程を追うことが重要になってくるのである。M. Merleau-Ponty, Phénoménologie de la Perception, Paris: Gallimard, 1951, p.460 et passim.
- 7) 菅野, 1983: pp.272-273. 菅野は黒人差別を引き合いにだし, 黒人はかつて人間としての[本質]を認められていなかったが, 現在では少なくとも表面上はそのような事態が解消されていることを例として, [本質]の改善の可能性を示唆している。
- 8) 菅野は[解釈学]を「人間の自覚の形式」であるとして, 解釈の重要性を主張している(同上書, はしがきより)。
- 9) スベルベル, 菅野盾樹訳「象徴表現は前理性的か」(『人類学とはなにか』紀伊国屋書店, 1984所収): pp.202-213, 227-237.
- 10) 同上書, p.228.
- 11) 同上書, pp.228-229.
- 12) 同上書, p.229.
- 13) クワイン, 大出晃他訳『ことばと対象』(勁草書房, 1984): P.42.
- 14) [記述]とは主観の介在しないデータのことと, 従来から科学的研究におけるデータは記述でなければならないとされてきた。しかし, これは認識とは別個に事物の存在を認める立場によるもので, 内部実在論においては, ある理論図式の内部でのみ[記述]が存在することになる。
- 15) 根底的翻訳とは, 両言語間に歴史的つながりや文脈性が皆無である二言語間で行なわれる翻訳のことである。同上書, pp.43-45.
- 16) 同上書, pp.44-83において, 未知の文化の言葉の例として用いられている。出所不明。
- 17) パットナム, 藤川吉美訳『科学的認識の構造』(見洋書房, 1984): pp.49-65.
- 18) 同上書, pp.139-159.
- 19) 坂野登『意識とはなにかーフロイト・ユング批判』(青木書店, 1985): p.50.

- 20) 小此木啓吾『フロイト』（講談社，1978）： p.87.
- 21) 同上書， pp.47-48.
- 22) エリクソン，仁科弥生訳『幼児期と社会』（みすず書房，1977）第7章参照。
- 23) メルロ＝ポンティ，滝浦静雄他訳「幼児期の対人関係」（『眼と精神』みすず書房，1966）： p.115.
- 24) デイヴィッドソン，野本和幸他訳『真理と解釈』（勁草書房，1991）： p.15. などを参照。この概念はN. ウィルソンに由来する言葉であるが，W. クワインはこれを【観察文】や【場面文】の解釈の基礎として採用したが，D. デイヴィッドソンはこの原理を全面的に採用した。
- 25) エリクソン，1977： p.317. 参照。エリクソンによると，乳児が成し遂げる最初の社会的行為は，母親が見えなくなっても，無闇に心配したり怒ったりしなくなることである。これは，母親が予測できる存在になったばかりでなく，内的な確実性をもつようになったからである。このような経験の一貫性や，連続性が自我同一性の基礎となる。そして，このような確固たる信頼感が基礎にあるからこそ主体は認識世界を形成していくことができるのである。
- 26) Reason, Truth and History. p.134 et passim.
- 27) ジョンソン，菅野盾樹訳『心の中の身体』（紀伊国屋書店，1991）参照。

(博士後期課程)